九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

estar　siendoについて

山村，ひろみ
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/5400

出版情報：言語文化論究. 14, pp.143-168, 2001-07-12. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

estar siendo について*

山　村　ひろみ

0．はじめに

本稿は山村(2000a)，山村(2000b)に引き続き，スペイン語の迂言形式 estar+gerundio の本質的機能を，それによって表出される事態との関係という観点から考察するものである。山村(2000a)では estar+gerundio の徹底的記述が実施され，その結果，同形式によって表出される事態の大半は atelic なもの，とりわけ activity 類事態であることが明らかにされたが[1]，そのとき同時に，一般に estar+gerundio による表出の難しいとされる state 類事態も実際には予想以上に同形式によって表出される，という事実が指摘された[2]。この state 類事態と estar+gerundio との関係はある意味で同形式の特異性を示唆するものであり看過すべきでない[3]。そこで本稿は，state 類事態の中でも特にその意味が希薄で通常 estar+gerundio によって表出されることの難しいといわれる繋辞動詞 ser とその補語からなる事態が同形式によって表出された estar siendo の構文を取り上げ，その詳細な観察とともに，それが山村(2000b)で提示された estar+gerundio の本質的機能によっていかに説明されるかを考察していくことにした[4]。以下では，まず，第1節において estar siendo に関する先行研究の紹介を行い，第2節では同形式の実態観察を行なう。また，同節では合わせて先行研究の問題点も指摘したい。そして，第3節では，第2節で見た estar siendo の実態が山村(2000b)で提起された estar+gerundio の本質的機能との関係でいかに解釈されるかを考察し，第4節では，estar+gerundio の持つ本質的機能と estar siendo 構文の相関関係から設定されるべき ser 文自体の時間構造はどのようなものであるかを論じる。

＊　本稿は2000年3月26日大阪外国語大学で行われた関西スペイン語学研究会での発表および2001年2月17日西南学院大学で行われた西南言語対照研究会での発表に修正を加えたものである。各発表で貴重な意見を下さった方々に深く感謝する。

1）Cf. 山村(2000a)，pp. 145-146.

2）Cf. Ibid., pp. 146-148.

3）山村(2000a)で実施された調査結果によれば，抽出総数754の estar+gerundio のうち state 類事態を対象としたものは91例で全体の12.2%を占めていた。また，Squartini(1998:104-107)は，スペイン語の estar+gerundio はイタリア語の stare+gerundio に比べて対象とする事態についての制約が緩い，と述べている。Cf. 山村(2000a)，pp. 145-148.

4）スペイン語には英語の be に相当する繋辞動詞に ser と estar の二種類あるが，estar+gerundio によって表出されるのは ser のみであり estar がこの形式によって表出されることはない。Cf. King(1992)，pp. 104-105，Butt & Benjamin(1994), p. 234，Yllera(1999), p. 3411.

1．estar siendo に関する主な先行研究

本節では estar siendo についての先行研究を紹介する。しかし，前述したように，従来，estar+gerundio は state 類事態を対象としない[5]，と考えられてきたため，この構文の存在そのものを指摘するものはあってもそれに何らかの考察を加えた研究は極めて少ない。そのような状況のもと本稿が参考にしたのは，次にあげる Ramos (1972) と Rodríguez Espiñeira (1990) である。

1.1. Ramos (1972)

Ramos (1972) は estar siendo という構文に関し次のような主張をしている。

① estar siendo は anglicismo というよりはむしろスペイン語の体系内で説明可能な構造的なものである。

② estar siendo には ser とも estar とも異なる独自の意味がある。

まず，①から見てみよう。Ramos によれば，従来 estar siendo という構文はスペイン語独自のものではなく英語からの借用であり，よって，誤用だとする見解が一般的だったという。しかし，Ramos はこの説に対して，同形式は著名な文学者たちによって使用されること，しかもそれは20世紀初頭というかなり早い時期からである，という二点からこの形式を英語からの単なる借用と見なすことは問題であるとした[6]。しかしながら，彼が estar siendo をスペイン語独自の体系に根ざすものと考えた最大の理由は次の②にあると本稿は考える。この点を述べるために Ramos は以下の三例を引いている[7]。

(1) El libro <u>está siendo</u> publicado. (Ramos 1972:130)
その本は出版されている。

(2) La niña <u>está siendo</u> buena. (Ibid.)
その女の子はいい子にしている。

(3) La primera cuestión <u>está siendo</u> gradualmente objeto de resolución. (Ibid.)
最初の問題は徐々に解決の対象となりつつある。

(1)は“ser+ 過去分詞”からなる受身文の estar+gerundio による表出である。この文に関して Ramos は，“Claro lo ‘normal’ sería decir ‘se está publicando el libro’, que es pasiva refleja impersonal progresiva (forma que se debe usar). El concepto del aspecto verbal entraría aquí para considerar cuál de las dos frases refuerzan lo inmediato de la acción,”（もちろん普通は非人称再帰受身進行形（これが使用すべき形式なのだが）の se está publicando el libro と言うだろう。これら二つの文［“el libro está siendo publicado” と “se está publicando el libro” 引用者注。］のうちどちらが当該事態の直接性［lo *inmediato* de la accion 引用者注］を強調している

5）Cf. Solé & Solé (1977), p. 45, Butt & Benjamin (1994), p. 234.

6）Cf. Ramos (1972), pp. 129-130. また，後述するように，最近では estar siendo の出現はそれほど珍しくなく，単なる英語の借用あるいは誤用と見なすことはより難しくなっている。Cf. Butt & Benjamin (1994), p. 235, De Bruyne (1995), p. 559, p. 574.

7）以下，例文中の estar siendo に該当する部分は下線を引いて示す。

かを検討するには動詞アスペクトの概念が関係してくるだろう。）と述べている。これによれば，一見同じ言語外現実を示しているように思われる“ser+過去分詞”の受身文の estar+gerundio と非人称再帰受身文の estar+gerundio の間には当該事態の inmediatez（直接性）に関して違いが見られる，ということになる。

また，Ramos は(2)についても“Lo usual sería ‘ha sido buena (hoy)’, ‘es buena (hoy)’, o ‘se comporta muy bien (hoy)’, pero no comunican el valor durativo *inmediato* atributivo”（通常ならば「(今日は) いい子だった」「(今日は) いい子だ」あるいは「(今日は) とても行儀良い」となるのだろうが，それらは［estar siendo が示すような］継続的で直接的な属性的意味を伝えない。）と述べている。つまり，(2)は“La niña ha sido buena.”, “La niña es buena”, “La niña se comporta muy bien.”のどれとも置換できない固有の意味，すなわち(1)で見たのと同様の直接的でかつ継続的な属性性を表出しているというのである。

一方，(3)について Ramos は，gradualmente（徐々に）という副詞句と共起していることから特にその継続性が強調される，と指摘しているが，本稿がここで注目したいのはむしろ estar siendo と gradualmente との共起について Ramos が述べた次の部分である。“El valor es el mismo ya mencionado, subrayándose el de duración mediante el adverbio *gradualmente*, lo cual es sumamente nuevo puesto que *ser* no admite adverbios por lo regular.［下線は引用者］”（意味はすでに述べたものと同じだが gradualmente という副詞によってその継続性が強調されている。この副詞との共起はきわめて珍しい。なぜなら ser は一般に副詞を認めないからである。）この記述によれば，ser 文は一般に副詞とは共起しないが，その estar+gerundio による表出は逆に共起可能ということになる。このことは，次の二文の文法性の差によって確認される。

(3) La primera cuestión está siendo gradualmente objeto de resolución. (Ibid.)
最初の問題は徐々に解決の対象となりつつある。

(3)' *La primera cuestión es gradualmente objeto de resolución.
最初の問題は徐々に解決の対象である。

(3)' は(3)の ser を対応する単純形に置き換えたものであるが，非文となる。この(3)と(3)' の比較から，ser 文とその estar+gerundio による表出文との間には時間構造の上で大きな違いがあると考えられる。これもまた Ramos の主張する estar siendo 独自の意味のひとつといえよう[8]。

1.2. Rodríguez Espiñeira (1990)

次に Rodríguez Espiñeira (1990) における estar siendo に関する記述を見る。この論文は estar siendo 自体を扱ったものではないが，estar+gerundio について言及するにあたり同構文に関しても一定の解釈を加えており参考になる。

まず，同論文で注目すべきは，estar siendo を英語の借用や誤用ではなくスペイン語の

8）ここでいう「時間構造の違い」とは共起する副詞句の違いから判断されるもので，gradualmente（徐々に）といった段階を示す副詞句と共起するのは一般に telic 事態であり，atelic 事態はそれらと共起できないことを指す。

特徴となるべき一言語事実として認めている点である。そして，その認識に立った上で，Rodríguez Espiñeira はそれではなぜそのようなことが可能なのか，つまり，なぜ本来 estar +gerundio による表出が難しいとされる ser 文が同形式によって表出されるのかを検討した。その結果，彼女が出した回答は次のようなものである。

Las cláusulas de (11) [Está siendo muy blanda con su hija 引用者注], no muestran, como pudiera pensarse, la compatibilidad entre estatividad y progresión, ya que las predicaciones han pasado a ser recategorizadas como dinámicas. En concreto, en el caso de los verbos de estado, se ha producido la conversión del mismo en transitorio. (Rodríguez Espiñeira 1990: 187-188)

(11) [Está siendo muy blanda con su hija. (彼女は娘に対してとても甘くなっている)] の文は予想されるような状態性と進行性の両立を示してはいない。というのも当該事態は動的なものに再範疇化されているからである。要するに，状態動詞の場合，状態から過渡的なものへの転化が起こっているのである。

Rodríguez Espiñeira によれば，estar+gerundio によって表出された ser 文は状態から動的なものへの転化が起こっているのだからもはや state 類事態とは見なされない，従って，それは state 類事態は estar+gerundio によって表出されないという一般論に反するものではない，ということになる。しかし，これは estar+gerundio の対象となる事態のラベルの張り替えにすぎず，そのような張り替えが起こる理由の説明にはなっていない。ここで明らかにしなければならないのは，なぜ同じ state 類事態に分類される事態の中に estar+gerundio によって表出されるものとされないものがあるのかということなのである。Rodríguez Espiñeira もこの問題に気がつかなかったわけではない。上記の引用文の後，次のように述べているからである。

En conexión con la ausencia de dinamicidad de los estados, es necesario precisar que si mantener un estado característico no requiere esfuerzo, mantener un estado contingente o temporal presenta cierta dificultad; de ahí que los estados contingentes presenten similitudes con las situaciones dinámicas (es más, pueden ser interpretados como situaciones dinámicas). Esto nos lleva a las subdivisiones tradicionales de los estados. Estos pueden referirse tanto a situaciones "normales", características, o, si quiere, permanentes, como a estados de cosas que no son los normales, es decir, a estados contingentes, temporales o transitorios. Describir un estado como transitorio supone concebirlo como propenso al cambio (y esta es precisamente la propiedad que define las situaciones dinámicas). (Ibid.: 188)

状態に動性が欠如していることに関連して，ある特性を示す状態を維持するには努力は要求されないが，偶発的あるいは一時的な状態を維持するには困難が伴うということを明確にする必要がある。その結果，偶発的な状態は動的事態と類似性を見せるのである（いやそれどころか，それらは動的事態と解釈されうる）。このことから状態の伝統的下位区分が生まれることになる。状態というのは「普通の」，特徴的な，あるいは，よければ永続的な状況に言及することもできれば，普通では

ない，つまり，偶発的，一時的あるいは過渡的な状態にも言及することができる。ある状態を過渡的なものとして記述することはそれを変化する傾向のあるもの（そして，まさにそれこそが動的状況を定義づける特性である）として捉えることである。

この記述によれば，Rodríguez Espiñeira はいわゆる state 類事態には可変性のあるものとないものとがあり，そのうち estar+gerundio によって表出可能なのは可変性のあるものである，と考えていることになる。しかし，この解釈には次のような問題がある。

まず，スペイン語にある二つの繋辞動詞 ser と estar の間に見られる estar+gerundio による表出の可能性の違いである。周知のように，これら二つの動詞については，前者は主語の永続的な「特徴」を示し，後者は主語の可変性のある一時的「状態」を示すといわれている。以下の例を参照されたい。

(4) El cielo es azul. 空は青い。
(5) Hoy el cielo está muy azul. 今日空はとても青い。

上記二例のうち ser が用いられた(4)は，主語「空」の特性としてその色が「青い」ことを述べているのに対し，estar が用いられた(5)は，主語「空」の今日の色の状態が他の日と比べて「とても青い」ことを述べているにすぎない。このような解釈に基づくならば，ser と estar のうち可変性を示すのは estar の方であり，従って，estar+gerundio による表出が可能なのも estar 文の方と予想されるだろう。しかし，実際はまったく逆の結果となる。estar 文は決して estar+gerundio によって表出されないからである。このことは state 類事態の estar+gerundio による表出に関与する可変性という概念が ser と estar の違いを説明する際に用いられるそれとは別物であることを示唆していると思われる。

もうひとつの問題は，可変性の有無と主語の agentividad(動作主性)との関係である。Rodríguez Espiñeira(ibid.:189)は，state 類事態の可変性と主語の agentividad の間には相互関係があると述べているが，それは以下の Brinton の考えに通じるものである。

Como ha señalado L.Brinton(Brinton, 1989, 35) expresiones como "ser un héroe" pueden expresar cualidades inherentes (y en ese caso se interpretan como estados, cuyo sujeto es paciente: *Es deliberadamente un héroe), o bien pueden expresar una actividad agentiva (pero en este caso ya no se interpretan como estados: "Está siendo un héroe" equivaldría a "se está comportando como un héroe"). La conclusión que podemos extraer es que los estados nunca se combinan con un agente. (Ibid.: 186 nota 20)

L.Brinton が指摘したように "ser un héroe"（英雄である）のような表現は生得的特質を表出することができるが（そしてその場合それらは状態と解釈され，その主語は paciente である： *Es deliberadamente un héroe.［彼は慎重に英雄である］），また，動作主的な活動も表出することができる（しかしこの場合，それらはもはや状態とは解釈されない："Está siendo un héroe"［彼は英雄である（英雄になっている）］は "se está comportando como un héroe"［彼は英雄のように振舞っている］に等しいだろう）。導き出される結論は，状態は決して動作主とは組み合わされないということである。

上記引用文によれば，estar+gerundio によって表出される ser 文の主語は動作主と解釈されることになるが，果たしてそのような見方は正しいのか。通常，agente(動作主)が有生であることを考えるならば，これはそのまま estar siendo の主語は有生か無生かという問いに繋がっていくが，次節で行われる同構文の実態調査ではこの点がひとつの重要なポイントとなる。

以上，ここでは Rodríguez Espiñeira(1990)における estar siendo の扱いを見た。その結果，同論文は，① state 類事態は可変性の有無に関して2種類に分けられ，そのうち estar +gerundio による表出が可能なのは可変性のある事態である，②当該事態の可変性の有無は主語の動作主性と深く関わっている，ことを主張していることが分かった。しかし，先述したように，この主張は必ずしも estar+gerundio の実態のすべてをうまく説明するものではない。第2節ではこの点を踏まえた上で，estar siendo の詳細な観察および本節で紹介した先行研究の問題点の指摘を行う。

2. 観察と問題点

本節では前節で見た先行研究の主張を踏まえながら，まず，① estar siendo の出現頻度，② estar siendo の分類，という二つの観点から estar siendo の実態を観察する。①は，Ramos (1972)の「estar siendo は単なる英語の借用でも誤用でもない」という主張の確認であり，②は主に Rodríguez Espiñeira(1990)の主張に基づく各事例の形態的および意味的分類である。そして，これらの観察の後，先行研究の主張を再検討していく。

2.1. estar siendo の出現頻度

estar siendo の出現頻度を調べるにあたっては，スペインで発行される週刊誌 Cambio16 のインタビュー記事をコーパスとした山村(2000a)の資料を用いた。そこでは抽出された estar+gerundio の754例すべてが，対象とする事態ごとに activity 類578例，state 類91例，accomplishment 類43例，achievement 類42例に分類されたが，このうち estar siendo は24例で全体の3.2%，また，state 類事態の中の26.3%を占めていた。この数字は，estar siendo がすでにスペイン語体系の中で安定した地位を獲得していること，また，estar siendo が他の形式で置換することのできない固有の意味を持っていることを示したもので，Ramos の主張の正しさを裏付けていると思われる[9)]。

2.2. estar siendo の分類

本節では estar siendo そのものの実態を観察する。そのために以下では，まず，出現した estar siendo の補語の種類による分類，次に，ser の主語の種類による分類を行い，その後，当該 estar siendo の意味内容による分類を行う。

---

9) estar+gerundio の出現頻度およびその用法を，英語とスペイン語の二言語併用の地域とスペイン語のみを使用する地域で比較した Torres Cacoullos(2000)によれば，英語と接触した地域の頻度がスペイン語のみを使用する地域のそれより著しく高いということはなく，また，その用法においても英語の干渉を受けた特殊なものが観察されるということはなかった，という。このことからも estar siendo を英語からの借用と見なすことは難しいと思われる。Cf. Torres Cacoullos(2000), p.224, p.229.

2.2.1.1. 補語の種類による分類

出現したestar siendoをその補語の種類によって分類すると，“estar siendo+過去分詞”，“estar siendo+名詞句”，“estar siendo+形容詞句”，の3種類になる。このうち最も頻度の高いのは以下に見られるような“ser+過去分詞”からなる受身文のestar+gerundioによる表出で，先に見た24例のestar siendoのうち17例がこのタイプであった。

(6) Tras el fracaso del socialismo real en el Este europeo está siendo cuestionada también la socialdemocracia frente a un neoliberalismo pujante. (1264:22)[10]
東欧における現実の社会主義の失敗の後，急成長する新自由主義に対し社会民主主義もまた問題にされている。

(7) La cuestión es si Milosevic puede vivir bajo las condiciones de un aislamiento internacional creciente al mismo tiempo que su máquina militar está siendo sistemáticamente destruida. (1433:56)
問題はMilosevicがその軍事的機構がシステマティックに破壊されているのと同時に増大する国際的孤立という条件のもとで生きていけるかどうかだ。

次に見る“estar siendo+名詞句”(例文8)，“estar siendo+形容詞句”(例文9)は，“estar siendo+過去分詞”に比べると頻度は低く，前者は24例中の4例，後者は3例だった。しかし，これらは先にRamosが指摘したように，対応する単純形に置換できないという点で貴重なものと思われる。

(8) El nuevo Banco Central Europeo está siendo el blanco de múltiples ataques, sobre todo, alemanes y franceses, (...). (1424:31)
新ヨーロッパ中央銀行は複数の，とりわけドイツとフランスの攻撃の的になっている。

(9) Estoy siendo extremadamente prudente, porque tengo un gran respeto institucional por lo que significa el mundo financiero (...). (1267:28)
私は非常に慎重になっている，なぜなら財界が意味するものに対して制度として大変な敬意を感じているからだ。

なお，名詞句あるいは形容詞句を補語とするestar siendoについては一定の制約があり，それらを補語とするすべてのser文がestar+gerundioによって表出可能ではない点には注意しなければならない。以下の例を参照されたい。

(10) *Ignacio está siendo corpulento. (Rodríguez Espiñeira 1990:187)
イグナシオは太っている。

---

10) 例文のうちCambio16から引用したものはその号数とページ数を，また，それ以外のものはその出典とページ数を記す。

(11) *Ya están siendo las tres. (Ibid.)
もう3時になっている。

(12) *Siete y nueve están siendo dieciséis. (King 1992:108)
7足す9は16になっている。

(13) *El nuevo director está siendo de Chile. (Ibid.)
新しい局長はチリの出身である。

このような estar siendo の制約に関して，Rodríguez Espiñeira(1990)は当該事態の可変性の有無と主語の動作主性を問題にしていたが，この点については 2.2.1.2 で詳述したい。

2.2.1.2. 主語の種類による分類

1.2. で見た Rodríguez Espiñeira(1990)は，estar+gerundio によって表出される state 類事態には可変性があり，その可変性は主語の動作主性と関わりがあると述べていた。そこで実際に出現した estar siendo を主語の性質によって分類してみると，次のようになった。

	無生主語	有生主語	合　計
estar siendo+過去分詞	9	8	17
estar siendo+名詞句	4	0	4
estar siendo+形容詞句	2	1	3

この分類結果のうち“estar siendo+過去分詞”の無生主語の頻度の高さについては，それが受身文の estar+gerundio による表出であることを考えれば当然であり，Rodríguez Espiñeira の主張に矛盾するとはいえない。当該事態の動作主を副次的なものとして表出する受身文という特質からすれば，その主語が無生であっても estar siendo の可変性の有無と主語の動作主性の関係が直接無効になるとは思われないからである。

しかし，“estar siendo+名詞句”および“estar siendo+形容詞句”において動作主性の認めにくい無生の主語が多く出現しているという事実は無視することができない[11]。以下，その全例をあげる。

(14) (=8)El nuevo Banco Central Europeo está siendo el blanco de múltiples ataques, sobre todo, alemanes y franceses, (...) (1424:31)
新ヨーロッパ中央銀行は複数の，とりわけドイツとフランスの攻撃の的になっている。

(15) Hay cuatro actitudes que resumen lo que está siendo su temporada: entrega frente

11) estar siendo+名詞句，estar siendo+形容詞句における無生主語の頻度の高さは山村(2000a)以外の研究・資料でも確認された事実である．Cf. Butt & Benjamin(1994)，De Bruyne(1995)，Gómez Torrego(1988)，King(1992)，Ramos(1972)，Squartini(1998)，Ueda(1987)，Yllera(1999).

al toro, regularidad en el éxito, su enorme tirón taquillero y, por último, que le están cogiendo bastante los toros. (1432:80)
あなたの今シーズンがどういうものかを要約する４つの姿勢があります。牛に対する献身，コンスタントな成功，その圧倒的人気，そして最後にずいぶんと牛に捕まっているということです。

(16) De cualquier manera, está siendo una campaña, ¿ no cree usted ?, un poco más insultante que otras. (1267:27)
なんにせよ，［今回のキャンペーンは 引用者注］他のよりもすこしばかり無礼なキャンペーンになっていると思いませんか。

(17) Los periódicos, las revistas, ¿ están sustituyendo a los mecenas de antaño ?/En cierto sentido sí, y están siendo un estímulo también... (1267:100)
新聞や雑誌がかつての文化のパトロンにとって代わっているのでしょうか。/ ある意味ではそうです，そして，それらは刺激にもなっています。

(18) No tengo el sentimiento de que la campaña está siendo muy áspera. (1267:27)
私はキャンペーンがそんなに荒れているという感じは持っていません。

(19) Observando lo desangelado que están siendo estas primarias, la gente se aburre, no sabe qué pensar sobre los candidatos, ... (1273:59)
この予備選挙がどんなにつまらなくなっているかを見て，人は退屈し，立候補者についてどう考えるべきか分からないのです。

(14)～(17)は“estar siendo+名詞句”，(18)(19)は“estar siendo+形容詞句”の無生主語の例文である。上で述べたように，動作主性というものを主語の有生性と結びつけて考えるならば，これらの例が示しているのは，estar+gerundio による表出の可否と主語の動作主性の有無との間には特別な関係はない，ということであり，それは Rodríguez Espiñeira の主張した「state 類事態の可変性の有無と主語の動作主性の相関関係」という見方に問題があることを示唆するものである[12]。

2.2.2. estar siendo の意味内容による分類

次に estar siendo の意味内容による分類を行う。この分類にあたっては，同形式に対応する単純形式の意味内容との違いが重要になってくる。そこで，以下ではこの単純形式の意味するところとの比較という観点から考察を進めていくことにする。

12) このような見方に対し，無生主語の“estar siendo+名詞句”，“estar siendo+形容詞”では擬人化が起こっていると考えることができる，従って，それらをもって Rodríguez Espiñeira の主張の反例とすることはできない，という意見がある。しかし，このような意見はどのような場合にその擬人化が起こるのかを明白にしない限り単なる「結果論」あるいは「循環論」に陥る危険性があると思われる。

2.2.2.1. 当該事態の「直接性」を示す estar siendo

まず，頻度が最も高かった“estar siendo+過去分詞”とそれに対応する単純形式との比較から見てみよう。

この estar+gerundio によって表出された“ser+過去分詞”の受身文とその単純形式による表出との間では意味内容の差が特に明らかになる。Gili Gaya(1979[12]:124)によれば，(20)のような完了動詞[13]の未完了アスペクト時制による“ser+過去分詞”は当該事態の習慣性・反復性を示し，(21)のような未完了動詞のそれは“ser+形容詞句”に類似した主語の継続的属性を示すという。以上のことを換言するならば，“ser+過去分詞”の未完了アスペクト時制による表出は当該事態を主語の属性として示す，ということになるだろう。

(20) La puerta es abierta por el portero. (Gili Gaya 1979[12]:124)
そのドアは守衛によって開けられる。

(21) Fulano es (era) muy conocido en aquella comarca. (Ibid.)
誰それはあの地方ではとてもよく知られている（いた）。

一方，“ser+ 過去分詞”の estar+gerundio による表出は，以下の例文中に出現する副詞句からも分かるように，単純形式による表出の場合とは逆に，当該事態を主語が被る一時的状態として提示する。このような“ser+過去分詞”の estar+gerundio による表出の意味内容は，その単純形式による表出が意味する主語の属性，つまり，その静的性質とは対極にある動的性質を持ったものであり，これこそまさに Ramos(1972)が“lo inmediato de la accion”（事態の「直接性」）と呼んだものといえよう。

(22) Ahora, como la última asombrosa adquisición de la familia Almodóvar para *Todo sobre mi madre*, está siendo saludada por la crítica internacional como una actriz de recursos increíbles. (1437:82)
今日，Almodovar 一家の最新の驚くべき収穫物である彼女は，国際的な批評家たちから信じられない能力の女優として歓迎されている。

(23) Su apresamiento ha permitido que se hagan juicios con jueces independientes, en los que se han detectado violadores de derechos humanos que en este momento están siendo procesados, cosa que no se hizo antes. (1452:73)
彼の逮捕で無党派の裁判官によって裁判が行われることが可能になり，そこでは現在起訴されている人権の侵害者たちが明らかになりましたが，このようなことはかつて行われなかったことです。

“estar siendo+過去分詞”に見られるこのような当該事態の一時性，直接性は“estar siendo+名詞句”，“estar siendo+形容詞句”にも同様に確認される。

---

13) Gili Gaya の完了動詞と未完了動詞の区別は山村(1999)の telic 事態と atelic 事態の区別に対応する。

(24) (=20) De cualquier manera, está siendo una campaña, ¿ no cree usted ?, un poco más insultante que otras. (1267:27)
なんにせよ，[今回のキャンペーンは 引用者注]他のよりもすこしばかり無礼なキャンペーンになっていると思いませんか。

(25) Estoy siendo extremadamente prudente, porque tengo un gran respeto institucional por lo que significa el mundo financiero (...). (1267:28)
私は非常に慎重になっています，なぜなら財界が意味するものに対して制度として大変な敬意を感じているからです。

このような“estar siendo+名詞句”，“estar siendo+形容詞句”の意味するところについては，“El niño está siendo bueno.”（その子はいい子にしている。）という estar siendo 文に対するスペイン語話者の次のような指摘も参考になる[14]。

“El niño está siendo bueno” se refiere a que la proposición ha ocurrido en un espacio de tiempo que se determina con “últimamente” o “estos días”. Por ejemplo, si mi sobrina se va a pasar una semana con mis padres, y llama mi hermana para preguntar cómo se está portando, mi padre puede decir “la niña está siendo muy buena”. Se refiere al período de días del que se está hablando. La proposición “la niña ser buena” es verdad de ese período.
“El niño está siendo bueno”（その子はいい子にしている）は，当該命題が“últimamente”（最近）あるいは“estos días”（近頃）といった副詞句によって特定される一定の時間に起こったことに言及している。例えば，私の姪が私の両親と1週間過ごすことになって姉がその子がどう振舞っているかを父に電話して尋ねたら，彼は“la niña está siendo muy buena”（とってもいい子にしてるよ。）と言うことができる。それは[そのとき]話題になっているその期間について言及している。“la niña ser buena”（その子がいい子である）という命題はその期間について真なのである。

このうち，estar siendo は当該命題が“últimamente”，“estos días”のような副詞句で特定される期間内に起こったことを示す，という部分は estar+gerundio の一般的用法に通じるところがあり特に重要である。

また，Torres Cacoullos (2000) の state 類事態の estar+gerundio による表出に関する以下の記述も，estar siendo の意味内容を考える上で見過ごすことのできないものである。

The examples of *estar*-plus-stative we find can be subsumed under the label of experiential. This includes expression of speaker attitude toward a new situation, as in the following example with *sintiendo* ‘feeling’.

(39)... *ahí en Juárez pues ya no se están sintiendo –fíjate qué cosa tan curiosa– muy muy mexicanos [ ]. porque ahí pos ya andan en dólares. [ ] Aquí no, ahí en Juárez no tienen el problema de las devaluaciones y todo...* (Chic'97#15A)

14) このコメントは神戸市外国語大学の Montserrat Sanz 氏からいただいた e-mail によるものである。記して謝意を表わしたい。

'...there is Juárez now they are not feeling–what a strange thing–very Mexican. Because there, well, they already do everything in dollars. Here no. There in Juárez they don't have the problem of devaluation and all that...'

The speaker, who is from the state capital Chihuahua, is commenting on the border city Juárez. The constrast with Chihuahua is indicated by distal *ahí*. Cooccurring *ya* is consistent with change from the norm and subjective evaluation. The speaker also interjects *fíjate qué cosa tan curiosa* 'what a strange thing'. (Torres Cacoullos 2000: 216)

この引用文によれば，state 類事態の estar+gerundio は話者が直接経験した何か新しい状況に対する態度を示す，ということになる。このコメントは先に見たスペイン語話者の estar siendo に対する解釈と合い通じるものがあるといえよう。なぜなら，話者の直接見聞きしたことというのは，必然的にある特定の期間に限定されて生起した事態に対する言及となっているからである。

以上，estar siendo は当該 ser 文の示す事態がある特定の期間に生起し，かつ，それが話者の直接経験であることを明示することを見てきたが，同形式にはこの他に，次節で見るようなもうひとつ別の意味内容もある。

2.2.2.2. 当該事態の「未成立」を示す estar siendo

estar siendo の示すもうひとつの意味内容とは次の例文に見られるようなものである[15]。

(26) (=3) La primera cuestión <u>está siendo</u> gradualmente objeto de resolución.
最初の問題は徐々に解決の対象となりつつある。

(27) <u>Está siendo</u> un mal año (no ha concluido, puede mejorar). (Yllera 1999:3411)
悪い年になりつつある（まだそうなっていない，よくなるかもしれない）。

(27)' Es un mal año (no se prevé que mejore). (Ibid.)
悪い年だ（よくなることは予想されない）。

(26)(27)の estar siendo は共起する副詞句またそれに対する解説から，当該事態がまだ完全には成立しておらずその途上にあることを示しているのが分かる[16]。このような意味を表出する estar siendo は，前節でみた estar siendo とは別にして考察すべきと考えられるが，当該 estar siendo がこの二つの意味内容のどちらを表出しているかの判断は難しく，結局は，共起する副詞句や文脈に頼るしかない。

2.3. 先行研究の検証

以上 estar siendo の実態を観察した。ここではその結果を踏まえて，先に見た先行研究

15) 以下の例文は山村(2000a)の資料に出現したものではない。同資料中に出現した estar siendo のうち当該事態の未成立を示していると明言できるものはひとつもなかった。

16) (26)については，同文を引用した Squartini(1998:105)がその英訳に "is gradually becoming" と achievement 類の become という動詞を用いていた点からもその「未成立性」が明らかである。

の主張の検証をしてみたい。

まず Ramos(1972)の ① estar siendo は anglicismo というよりはむしろスペイン語の体系内で説明可能な構造的なものである，② estar siendo には ser とも estar とも異なる独自の意味がある，という主張は，今回の観察でも有効であることが確認されたといえる。①については，同構文の estar+gerundio 全体に占める割合が示され，その上で同構文が決して単なる借用や誤用ではない点が明らかになったし，また，②については，estar siendo という構文はその補語によって“estar siendo+過去分詞”，“estar siendo+名詞句”，“estar siendo+形容詞句”の三種類に分けられ，そのそれぞれにおいて対応する単純形式によっては表出されない特殊な意味機能，つまり，当該事態がある特定の期間に生起しそれを話者の直接経験として表出する機能や，当該事態がまだ完全には成立してないことを表出する機能のあることが確認されたからである。

次に，Rodríguez Espiñeira(1990)の主張について見てみる。この先行研究によれば estar+gerundio による表出の可能な state 類事態には可変性があり，それは当該事態の主語の「動作主性」によって保証されるということだった。そこで今回の観察では，特に主語の動作主性と estar siendo による表出との相関関係に焦点をあてその有効性を検証したが，結果的には estar siendo 文の多くが動作主性を欠いた無生主語であることが判明し，Rodríguez Espiñeira の説には検討の余地のあることが分かった。しかし，それでは estar siendo の出現またその実態はいったいどのように説明されるべきなのか。今のところ本稿は，そのためには山村(2000b)で提起された estar+gerundio に対する解釈が役に立つと考えている。そこで次節では，まず，この山村(2000b)が主張する estar+gerundio の本質的機能を概観し，次に，それを estar siendo 文に応用しながら同構文の実態の分析およびその説明を行うことにしたい。

3．山村(2000b)による estar+gerundio の解釈から見た estar siendo

3.1．山村(2000b)

山村(2000b)は，山村(2000a)で行われた estar+gerundio の実態調査の結果に基づき同形式の本質的機能を考察したものである。そこで提起された estar+gerundio の本質的機能の仮説は次のようなものであった。

仮説： estar+gerundio は当該事態を activity 類化し，その連続的・累積的成立を明示するための形式である。

山村(2000b)はこの仮説を具体的に説明するために，以下の公式も合わせて提示した。

仮説の公式化： i) proposición (Prop.): [X]

ii) evento(e): ~Prop. & Prop. = ~[X] & [X] = <X>

iii) estar+ger.: $e^1/t^1 + e^2/t^2 + e^3/t^3 + \ldots e^n/t^n$

iv) 時制を持った estar+ger.: Tp.(estar+ger.)

Tp. = {PRES., PRET., IMP....etc.}

この公式に則って山村(2000b)の提起した estar+gerundio の本質的機能を解説すると次のようになる。

まず，通常の発話に出現する時制を持った estar+gerundio 文はすべて estar+gerundio(=estar+ger.)という命題に当該の時制がオペレータとして付加されたものと考えられる[17),18)]。それが上の公式のiv)にある Tp.(=Tiempo)(estar+ger.)の意味するところである。

次に，その時制のスコープに入る estar+gerundio(=estar+ger.)自体の解釈を見るが，それは上記公式のⅰ)～ⅲ)のように分析される。最初のⅰ)は estar+gerundio 文の基となるべき命題(以下，基本命題と記す)を示すが，ここでいう命題とはいわゆる不定詞によって表出される文のことで時制・法は持っていない。次のⅱ)は，estar+gerundio の本質を考える上で最も重要な evento 性(出来事性)の説明である。山村(2000b)のいう evento 性とは一言でいうと「当該事態の未成立から成立への変化」のことであり，具体的には当該事態の pretérito による表出によって示される。ⅱ)のうち「当該事態の未成立から成立への変化」は ~Prop. & Prop. (=~[X]&[X])という記号で示され，それが当該事態の pretérito に相当することは <X> という記号によって表わされている。最後のⅲ)では，ⅰ)，ⅱ)で見た内容が具体的に estar+gerundio とどのような関係を持つのかが示されている。そのうち estar+ger.: $e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+\ldots e^n/t^n$ が意味しているのは，estar+gerundio がⅱ)で見た当該事態の evento 性(出来事性)の集積であること，つまり，estar+gerundio が当該事態の pretérito による表出の連続的累積であることを示している。そして，この部分こそまさに山村(2000b)の仮説中にある「estar+gerundio は当該事態を activity 類化し」の「activity 類化」が示すところであり，結局，山村(2000b)の提唱する estar+gerundio の本質的機能とはこの当該事態の activity 化にほかならない，ということになるのである。

3.2. 山村(2000b)の仮説の estar siendo に対する応用

本節では，上で見た山村(2000b)の estar+gerundio の本質的機能に対する仮説を，実際の estar siendo 文に応用してみる。以下では，まず，estar+gerundio による表出の不可能な ser 文を取り上げ，それが同仮説によってどのように説明されるかを見る。その後，estar+gerundio による表出の可能な ser 文をその意味内容に従って分析する。

3.2.1. estar+gerundio による表出の不可能な ser 文

2.2.1.1. では“ser+名詞句”“ser+形容詞句”のすべてが estar siendo によって表出されるわけではないことを見たが，山村(2000b)の仮説に従えば，少なくともどのような ser 文が対応する estar+gerundio によって表出されるかを予測することができる。以下の例を参照されたい。

---

17) 実際の estar+gerundio には時制のほかに法も関わっているが，山村(2000b)は estar+gerundio と法の関係については何も言及していない。

18) これは換言すると，山村(2000b)が estar+gerundio による表出は対応する単純形式に estar+gerundio というオペレータが付加されたものとは考えていないことを示している。つまり，山村(2000b)によれば“María está corriendo rápido.(マリアは速く走っている)”は“María corre rápido”(マリアは速く走る)という現在形の文に estar+ger. が適用されたのではなく，[María estar corriendo](マリアが速く走っていること)という命題に presente の時制オペレータが適用されたものと解釈されるということである。

(28) *Está teniendo los ojos azules. (Rodríguez Espiñeira 1990:187)
彼は青い目を持っている。

(28)'??Tuvo los ojos azules.
彼は青い目を持った。

周知のように，スペイン語の事態の中には(28)のように estar+gerundio による表出の不可能あるいは大変困難なものがあるが，それらは(28)' が示すように pretérito による表出も不可能あるいは困難であることが分かっている。この事実は山村(2000b)の仮説によれば当然の結果といえる。なぜなら estar+gerundio による表出が山村(2000b)のいうように「当該事態の未成立から成立への変化」，すなわち，その pretérito による表出の連続・累積を示すとすると，逆に pretérito による表出自体が不可能な事態はその累積も不可能であることが論理的に予測されるからである[19]。このような観点から estar siendo による表出の不可能な ser 文を見直すならば，それらもまた山村(2000b)の仮説の予測に従ったものであることが分かる。(29)は estar+gerundio による表出の不可能な ser 文であるが，これを先に見た山村(2000b)の公式に従って分析すると次のようになる。

(29) (=10) *Ignacio <u>está siendo</u> corpulento. (Rodríesta Espiñeira 1990:187)
イグナシオは太っている。

i) proposición(Prop.):[Ignacio ser corpulento](イグナシオが太っていること)
ii) evento(e): ~Prop. & Prop.
= ~[Ignacio ser corpulento] & [Ignacio ser corpulento]
=<*Ignacio fue corpulento>
iii) estar+ger.: $e^1/t^1 + e^2/t^2 + e^3/t^3 + \ldots e^n/t^n$
=*Ignacio <u>está siendo</u> corpulento.

上記分析によれば，[Ignacio ser corpulento](イグナシオが太っていること)という ser を用いた基本命題が estar+gerundio によって表出されないのは，ii) の部分が示すように，この命題が pretérito によって表出されない evento 性を欠いたものだからということになる[20]。一方，同じ ser を用いた命題でも(30)のように pretérito による表出の可能なものは

19) しかし山村(2000b)でも指摘されたように，pretérito による表出の可能な事態のすべてが estar+gerundio による表出も可能というわけではない点には注意する必要がある。とはいえ，本稿は今のところ，そのような事例も個別に説明のつくものであり山村(2000b)の仮説そのものの有効性を損なうものではないと考えている。

20) 同様のことは先に見た他の estar siendo が不可能な例文についてもあてはまり，それぞれ対応する pretérito 文は非文となる。
(11) *Ya <u>están siendo</u> las tres. もう3時になっている。
(11)'*Ya fueron las tres.
(12) *Siete y nueve <u>están siendo</u> dieciséis. 7足す9は16になっている。
(12)'*Siete y nueve fueron dieciséis.
(13) *El nuevo director <u>está siendo</u> de Chile. 新しい局長はチリの出身である。
(13)'*El nuevo director fue de Chile.

問題なく estar+gerundio による表出も可能になる。

(30) Está siendo muy blanda con su hija. (Ibid.)
彼女は娘にとても甘い。

i) proposición(Prop.):[(ella) ser muy blanda con su hija](彼女が娘にとても甘いこと)
ii) evento(e): ~Prop. & Prop.
= ~[(ella) ser blanda con su hija] & [(ella) ser blanda con su hija]
=<(ella) fue blanda con su hija>
iii) estar+ger.: e^1/t^1 + e^2/t^2 + e^3/t^3 + ... e^n/t^n
=Está siendo muy blanda con su hija.

[(ella) ser muy blanda con su hija](彼女が娘にとても甘いこと)という命題は上記分析の ii)の部分が示すように pretérito による表出が可能で，その結果，その集積を示す estar+gerundio による表出も可能となっている，と考えることができる。

さて，以上のことから，estar+gerundio によって表出可能な ser 文は pretérito による表出が可能なものという結論を一応出すことができるが，ひとつ問題になるのはこの結論と Rodríguez Espiñeira(1990)のいう「可変性」の有無や主語の「動作主性」との関係である。これらの問題については 3.2.3. で改めて扱いたい。

3.2.2. estar+gerundio による表出の可能な ser 文

3.2.2.1. estar siendo が当該事態の「直接性」を示す場合

次に，実際に出現した estar siendo が山村(2000b)の仮説によってどのように説明されるかを考察する。まず，先の観察で頻度の高かった当該事態の「直接性」を示す estar siendo 文がどのように分析されるかを見ていきたい。以下は“ser+ 過去分詞”の estar+gerundio による表出の分析である。

(31)(=6) Tras el fracaso del socialismo real en el Este europeo está siendo cuestionada también la socialdemocracia ~. (1264:22)
東欧における現実の社会主義の失敗の後，社会民主主義もまた問題にされている。

i) proposición(Prop.):[ser cuestionada la socialdemocracia]
(社会民主主義が問題にされること)
ii) evento(e): ~Prop. & Prop.
= ~ [ser cuestionada la socialdemocracia] & [ser cuestinada la socialdemocracia]
=<fue cuestionada la socialdemocracia>
iii)estar+ger.: e^1/t^1 + e^2/t^2 + e^3/t^3 + ... e^n/t^n
=Está siendo cuestionada la socialdemocracia.

“ser+ 過去分詞” の estar+gerundio による表出の意味するところは，当該事態の未成立から成立への変化の累積という山村(2000b)が唱える estar+gerundio の本質的機能とうまく合致する。すなわち，話者が“ser+過去分詞”によって示される事態を“estar siendo +過去分詞”という形式によって表出するのは，そのような事態が概念上何度も繰り返し成立したと話者自身が認識しているからであり，この認識のあり方こそ Ramos のいった estar siendo の「直接性」に通じるものだと考えられる。このような観点からすると，2.2.1.1. で見たように“ser+過去分詞”の単純形式による表出が専ら主語の示す referent の静的属性記述になるのは，それが“estar siendo+過去分詞”の明示する話者の側からの当該事態の連続的・累積的成立という認識を欠いたものだからということになるだろう。

次に，estar+gerundio によって表出された“ser+名詞句”，“ser+形容詞句”の分析を見る。

(32)(=8) El nuevo Banco Central Europeo <u>está siendo</u> el blanco de multiples ataques, sobre todo, alemanes y franceses. (1424:31)

新ヨーロッパ中央銀行は多数の攻撃とりわけドイツとフランスの攻撃の的になっています。

i) proposición(Prop.):[el nuevo Banco Central Europeo ser el blanco de un ataque ~]
(新ヨーロッパ中央銀行が攻撃の的であること)

ii) evento(e):~Prop.&Prop.
= ~[el nuevo Banco Central Europeo ser el blanco de un ataque]&
[el nuevo Banco Central Europeo ser el blanco de un ataque]
=<el nuevo Banco Central Europeo fue el blanco de un ataque>

iii) estar+ger.: $e^1/t^1 + e^2/t^2 + e^3/t^3 + \ldots e^n/t^n$
=El nuevo Banco Central Europeo <u>está siendo</u> el blanco de múltiples ataques.

(38)は“ser+名詞句”の estar+gerundio による表出の分析である。ここでも結果的には山村(2000b)の仮説がうまく適用されているのが分かるが，よく見ると“ser+過去分詞”の estar+gerundio による表出の分析とは異なっているところがある。それは estar+gerundio の対象となる基本命題の事態と同形式によって表出された事態との間に違いが見られる点である。すなわち，上記の分析では，estar+gerundio 文の中で múltiples ataques (複数の攻撃)となっている部分が，その基となる基本命題の中では un ataque(あるひとつの攻撃)という別の形式で表わされているのである。本稿がこのような解釈をするのは，山村(2000b)でも主張されたように，estar+gerundio によって表出された文に観察される主語や補語の不定複数形は同形式の示す当該事態の累積的成立の結果生じたものと考えていることに因る[21]。

“ser+ 形容詞句”の estar+gerundio による表出の分析はすでに(30)で見たので繰り返す

21) しかし，estar+gerundio によって表出された事態の基本命題のすべてが常にこのような扱いを受けるわけではない。中には estar+gerundio によって表出された事態の一部だけが基本命題として認定され他の部分は変数として残される場合もある。このような例については山村(2000b)の pp. 12-13を参照されたい。

ことはしないが，そこでも山村(2000b)の仮説がうまく適用された点は確認しておきたい。

3.2.2.2. estar siendo が当該事態の「未成立」を示す場合

次に，その estar+gerundio による表出が当該事態の「未成立」を示す ser 文が，山村(2000b)の仮説によってどう分析されるかを見てみよう。山村(2000b)によれば，この estar siendo のように，estar+gerundio による表出が当該事態の未成立を示す典型としては achievement 類事態の同形式による表出があげられる。そこで，以下では，まず，この achievement 類事態の estar+gerundio が山村(2000b)によってどのように分析されるかを見ておく。

(33) [...] han declarado que la OTAN <u>está perdiendo</u> la guerra. (1434:64)
NATO は戦争に負けそうだと断言した。

i) proposición1(Prop.1):[la OTAN perder la guerra](NATO が戦争に負けること)
proposición2(Prop.2):[Prop.1 が成立に至るまでの準備段階に確認される事態]
ii) evento(e):~Prop.2 & Prop.2
= ~[Prop.1 が成立に至るまでの準備段階に確認される事態] &
[Prop.1 が成立に至るまでの準備段階に確認される事態]
=< Prop.1 が成立に至るまでの準備段階に確認される事態 >
iii) estar+ger.: $e^1/t^1 + e^2/t^2 + e^3/t^3 + \ldots e^n/t^n$
=La OTAN <u>está perdiendo</u> la guerra.

achievement 類事態の estar+gerundio による表出の分析で特徴的なのは，上記の i)に見られるように，同形式によって表出される基本命題の他に，その基本命題が成立するまでに確認される事態が第二の基本命題として設定される点である。このような特別な操作が achievement 類事態の estar+gerundio の分析に必要となるのは，その意味するところを分析の過程で正しく提示するためにほかならない。つまり，achievement 類事態の estar+gerundio に山村(2000b)の公式をそのまま適用すると，それはまだ成立していないはずの基本命題の累積的成立を示すことになり，それが現実に表出する意味内容と齟齬を起こすことになるからなのである。

ところで，上記の分析で新たに導入された第二の基本命題は何ら形式的実体を持たないものであるが，だからといって任意に設定されるものではない。それは estar+gerundio によって表出される事態の準備段階として一般的に認知された事態でなければならないからである。換言すれば，一般的にそのような準備段階を設定しにくい achievement 事態は以下の例文が示すように estar+gerundio による表出が不可能になるということである。

(34) *Juan <u>está dando</u> un grito. (Gómez Torrego 1988:143)
フアンは一声大声をあげつつある。

(35) *<u>Estoy encontrando</u> la cartera. (Ibid.)
私は財布を見つけつつある。

以上のことを踏まえて，問題の estar siendo 文を分析すると次のようになる。

(36) La primera cuestión <u>está siendo</u> gradualmente objeto de resolución.
最初の問題は徐々に解決の対象となりつつある。

i) proposición1(Prop.1):[la primera cuestión ser objeto de resolución]
(最初の問題が解決の対象になること)
porposición2(Prop.2):[Prop.1 が成立に至るまでの準備段階に確認される事態]
ii) evento(e):~Prop.2 & Prop.2
= ~[Prop.1 が成立に至るまでの準備段階に確認される事態] &
[Prop.1 が成立に至るまでの準備段階に確認される事態]
=< Prop.1 が成立に至るまでの準備段階に確認される事態 >
iii) estar+ger.: $e^1/t^1 + e^2/t^2 + e^3/t^3 + \ldots e^n/t^n$
=La primera cuestión <u>está siendo</u> objeto de resolución
iv) [estar+ger.] + Adv.(gradualmente): La primera cuestión <u>está siendo</u> gradualmente objeto de resolución.

上のiv)の分析によれば，段階を示す副詞 gradualmente は当該文の基本命題ではなく，その estar+gerundio による表出を修飾していることが分かる。対応する ser 文の単純形式による表出が同副詞との共起を認可しない点を考慮するならば，このことは ser 文の単純形式による表出と estar+gerundio による表出との時間構造の違いを明確に示したものといえよう。

以上，3.2.2. では estar+gerundio によって表出された ser 文が山村(2000b)の仮説によっていかに分析されるかを見てきた。その結果，一見特殊に見えるこの estar siendo 文も estar+gerundio に付与されたその本質的機能に基づいたものであることが明らかになった。しかし，これで estar siendo 文の特徴がすべて説明されたわけではない。次節では，特に，対応する単純形式によって表出された ser 文との比較で指摘される estar siendo 文の特徴を，山村(2000b)の仮説との関係から改めて考察してみたい。

3.2.3. estar siendo と「変化性」

Rodríguez Espiñeira は，estar+gerundio による表出の可能な ser 文は変化の可能性がある，あるいは，変化の傾向がある動的なものに転化したものだと指摘していたが，その際用いられた「変化」の概念は主語の動作主性と深く結びついたものであった。しかし，2.2.1.2 でも見たように，estar siendo 文の主語が必ずしも動作主性を持っているわけではないことからすれば，そのような見方には問題があるといわざるをえない。それでは，estar+gerundio によって表出されうる ser 文の持つ「変化性」とはどのようなものなのだろうか。

これまで estar siendo 文を説明するにあたり用いてきた山村(2000b)の仮説に従えば，それは ser を用いて表わされる当該事態の evento 性（つまり，当該事態が pretérito によって表出されるか否か）にほかならず，それを有したものであれば，たとえその主語が無生の被動作主であっても estar+gerundio による表出は可能ということになる[22)]。

しかし，それでは，その当該事態の evento 性とはいったいどのようなものなのか。この点について論じることは本稿の目的を越えるものであるが，山村(1998a)の観察がこの問題を考える上で大いに参考になることだけは指摘しておきたい。この論文は，その主語が無生である事態の pretérito による表出の可否を扱ったものであるが，その観察によれば，pretérito による表出の可否を決定するのは，当該事態の示す内容が言語外現実として生起可能なものとして話者に認知されているか否か（あるいは認知されたか否か）であり，それは必ずしも主語の「動作主性」の有無とは一致しない，という。少なくとも本稿にとってこの指摘は，estar siendo 文の主語が無生の被動作主であってもそれが当該 ser 文の evento 性の欠如に直結するわけではない，ということを保証するもので重要である。

3.2.4. estar siendo と「一時性」

estar siendo については「変化性」と関連してその「一時性」も強調されることが多い。しかし，この「一時性」が estar siendo に特有のものではなく，広く estar+gerundio によって表出された文全体の特徴であることを考えるならば，それは estar+gerundio の機能そのものに依拠したものといえるだろう[23)]。そこで，本節では，特に，estar siendo の「一時性」が山村(2000b)の仮説によってどのように説明されるかを考えてみたい。

まず，1.2. で見たように，estar siendo の「一時性」が estar という繋辞動詞自体に付与される一時性とは性質を異にしている点は確認しておく必要がある。また，先に見たスペイン語話者の指摘によれば，estar siendo の「一時性」はある特定の期間の事態を示すという意味での「一時性」であり，últimamente(最近)，estos días(近頃)といった副詞句との共起によって示されるものである，という点も見過ごせない。以上のことを踏まえた上で estar siendo の「一時性」を考えるならば，それは estar+gerundio の本質的機能を示す公式の中にある次の部分に基づくものと思われる。

iii) estar+ger.: $e^1/t^1 + e^2/t^2 + e^3/t^3 + \ldots e^n/t^n$

上記の公式が示すのは当該事態の連続的・累積的成立であるが，本稿は当該事態に対するこのような認識の仕方そのものが estar siendo に「一時性」という特徴を与えることになるのだと考える。このことは以下に見る，同じ ser 文の単純形式による表出の時間構造と estar+gerundio による表出の時間構造の違いに明らかである。

---

22) estar+gerundio による表出の可能な ser 文の多くは referent である主語に対する話者の評価を示している。このような ser 文の pretérito による表出は，話者による主語(=referent)に対する当該評価の成立そのものを示すが，そのような評価の成立に当たっては当該評価の基となる主語(=referent)の何らかの行動あるいは主語に対する外部からの活動があるのが普通である。本稿は，そのような主語(=referent)の行動や主語に対する外部からの活動はあくまで言語外現実に属すものであり，ser 文自体が示す意味内容とは別物だと考えている。しかし，先行研究の多くはこの主語(=referent)に関わる言語外現実と ser 文という評価の表現そのものを混同しており，その結果，先に見た Brinton のような，[ser un héroe](英雄であること)は *Es deliberadamente un héroe(彼は慎重に英雄である)では状態であるが，Está siendo un héroe(彼は英雄になっている)では Se está comportando como un héroe(彼は英雄のように振舞っている)に等しい動作主的な活動を示す，といった解釈が生じることになるのだと思われる。

23) estar+gerundio の「一時性」については Butt & Benjamin(1994²:234)を参照されたい。

(37) María es buena. (マリアはいい子だ)

I F(arb)

e^1/t^1

(37)' María está siendo buena. (マリアはいい子にしている)

I I I I F(arb)

e^1/t^1 e^2/t^2 e^3/t^3... e^n/t^n

(37), (37)'は[María ser buena](マリアがいい子であること)という命題の presente による表出の時間構造と estar+gerundio による表出の時間構造をそれぞれ網掛け(=)によって図示したものである。それによれば，当該命題の presente による表出は e^1/t^1 が示す当該命題成立後の静的な結果状態を表わしているのに対し，その estar+gerundio による表出は当該事態の連続的成立を表わしていることが分かる。このうち presente の表出が示す当該命題成立後の結果状態は，その有効性が失われない限り持続するものと考えられるので，「一時性」という解釈とは矛盾することになるだろう。一方，同命題の estar+gerundio による表出が示すのは，当該事態の主語が示す referent に対して話者が（補語が示すような）ある種の評価を連続的に行ったということである。この評価という行為自体が evento 性を持ったものであることを考えるならば，それは presente による表出が示す静的状態性とは対極にあるものであり，「一時性」という解釈とは何ら矛盾しないものと考えられる。

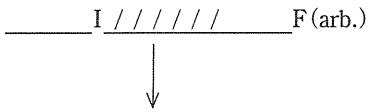
上記の考え方は，estar siendo が últimamente(最近)，estos días(近頃)といった特定の期間を示す副詞句と共起することをも説明することができる。ここで重要になるのは先に見た $e^1/t^1+e^2/t^2+e^3/t^3+e^n/t^n$ のうち，特に，$t^1+t^2+t^3+t^n$ の部分である。山村(2000b)によると，e^n/t^n の t^n は当該事態の成立時を示しているので，その連続は当該事態の成立時の集積に等しい。本稿は，この当該事態の成立時の集積こそ estar siendo と共起する特定の期間副詞句の示すところに相当する，と考える。ある時間の集積は必ず一定のインターバルを示すことになるからである。

以上，本節では，estar siendo が山村(2000b)の提起した estar+gerundio の本質的機能の仮説によっていかに解釈・説明されるかを見た。次節では，ここで明らかになった estar+gerundio の本質的機能と estar siendo の相関関係から想定される ser 文自体の時間構造がどのようなものであるかを考察する。

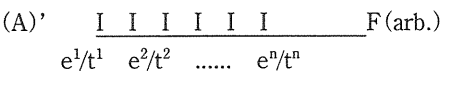
4. estar siendo から見た ser 文の時間構造

第2節で見た estar siendo の意味するところからすると，同形式は時間軸上の異なる2つの部分を示すといえる。まず，当該事態の「直接性」を示す estar siendo から見ると，その意味するところは(A)，(A)'のようになる。

(A) estar siendo が当該事態の「直接性」を示す場合：

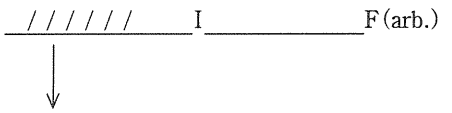


I ＝ 当該事態の成立時点
F(arb.) ＝ 当該事態の恣意的終結時点

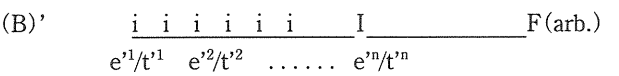


当該事態の「直接性」を示す estar siendo は(A)の時間軸の / / / / の部分を示す。そして，その部分だけを拡大してみると(A)' のようになる。これら二図に明らかなように，「直接性」を示す estar siendo は当該事態の成立を標示する I の連続を表出する。このとき注目すべきは，ser 文は atelic であるためその連続的生起にあたり当該事態がいちいち終結する必要はない，ということである。一方，当該事態の「未成立」を示す estar siendo の意味するところは(B)，(B)' のようになる。

(B) estar siendo が当該事態の「未成立」を示す場合：

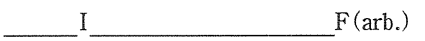


i ＝ 当該事態成立の準備段階で確認される事態の成立



今，ser 文が示す当該事態の成立時点を I で示すと，その「未成立」を示す estar siendo が表わすのは(B)の / / / / の部分となる。そして，この部分を拡大すると(B)' のようになる。この(B)' の中にある i が示しているのは，当該事態の成立の準備段階で確認される事態（3.2.2.2 で見た Prop. 2）の成立である。

以上，estar siendo の意味するところを時間軸上に示してみたが，それに従うならば，ser 文自体の時間構造は次のように想定されることになるだろう。



この時間構造は，当該事態の開始時点(=I)が明記されているという点で，従来 state 類事態に設定されてきた時間構造とは異なっている。これまでの state 類事態の時間構造には，以下の Smith(1991)の図が示すように，開始時点も終結時点も設定されないのが一般的だったからである。

Smith(1991:37)

Smith(1991:37)は，state 類事態の開始時点と終結時点は当該事態そのものの時間構造には組み込まれない，それ故それらは括弧でくくられる，と述べている。しかしながら，

少なくともその estar+gerundio による表出が意味するところから判断するならば，スペイン語の ser 文にこの解釈はあてはまらない。その estar+gerundio が achievement 類事態のそれと同じく当該事態の「未成立」を示すことができるという事実に基づくならば，開始時点の設定が不可欠となるからである[24),25)]。

5．まとめ

以上，本稿は state 類事態を代表する ser 文の estar+gerundio による表出の観察を行い，それが山村(2000b)の提起した estar+gerundio の本質的機能に関する仮説によってどのように説明されるかを見てきた。その結果，明らかにされたことをまとめると，以下のようになる。

- ser 文の estar+gerundio による表出である estar siendo は anglicismo や誤用ではなく，スペイン語の体系内で説明可能な構文である。
- estar siendo には ser とも estar とも異なる独自の意味，すなわち，当該事態がある特定の期間に生起しそれを話者の直接経験として表出する機能（「直接性」）や，当該事態がまだ完全には成立していないことを表出する機能（「未成立」）がある。
- estar siendo の上記機能は，山村(2000b)で提起された estar+gerundio の本質的機能に対する仮説，すなわち，「estar+gerundio は当該事態を activity 類化し，その連続的・累積的成立を明示する形式である」という仮説によって説明可能である。また，同仮説は estar siendo によって表出不可能な ser 文を予測することもできる。
- 従来指摘されてきた estar siendo の「変化性」は当該 ser 文の evento 性，すなわち，その「未成立から成立への変化性」のことであるが，それは必ずしも先行研究が指摘してきた主語の動作主性とは結びつかない。
- 従来指摘されてきた estar siendo の「一時性」は，山村(2000b)の提起した estar+gerundio の本質的機能の仮説にある「当該事態の連続的・累積的成立の明示」から必然的に生じる効果といえる。
- ser 文の estar+gerundio による表出の意味するところから同文の時間構造を考えるならば，開始時点の設定が不可欠となる。

参考文献

Butt, John & Benjamin, Carmen (1994[2]): *A New Reference Grammar of Modern Spanish,* London: Edward Arnold.

De Bruyne, Jacques (1995): *A Comprehensive Spanish Grammar*, Oxford: Blackwell

24) しかし，achievement 類事態のすべてがその「未成立」を示すために estar+gerundio による表出が可能なわけではないのと同様に，ser 文の estar+gerundio による表出のすべてがこの「未成立」の解釈を認めるわけではない。

25) ser 文以外の state 類事態の estar+gerundio が ser 文のそれと同じ振る舞いをするのか否かは今のところ不明である。しかし，その pretérito による表出の意味するところからすると，スペイン語の state 類事態の時間構造には一般的に開始点が想定されると考えられる。Cf. 山村(1998b)

Publishers.

Gili Gaya, Samuel(1979[12]): *Curso superior de la sintaxis española,* Barcelona: Biblograf.

Gómez Torrego, Leonardo (1988): *Perífrasis verbales,* Madrid: Arco/Libros. S. A.

King, Larry D. (1992): *The Semantic Structure of Spanish,* Amsterdam: John Benjamin Publishing Company.

Ramos, Manuel (1972): "El fenómeno de《estar + siendo》", *Hispania*, 55, 128-131.

Rodríguez Espiñeira, María José(1990): "Clases de 'Aktionsart' y predicaciones habituales en español", *Verba* 17, 171-210.

Smith, Carlota (1991): *The Parameter of Aspect,* Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

Solé, Yolanda R. & Solé, Carlos A.(1977): *Modern Spanish Syntax. A Study in Contrast*, Lexington: D.C Heath and Company.

Squartini, Mario (1998): *Verbal Periphrases in Romance: Aspect, Actionality, and Grammaticalization,* Berlin New York: Mouton de Gruyter.

Torres Cacoullos, Rena (2000): *Grammaticization, Synchronic Variation, and Language Contact: A Study of Spanish progressive – ando constructions*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Ueda, Hiroto(1987): *Análisis lingüístico de obras teatrales españolas (III) Textos e índices de palabras (Versión aumentada)*, Tokio: Universidad Nacional de Estudios Extranjeros de Tokio.

Yllera, Alicia (1999): "Las perífrasis verbales de gerundio y participio", *Gramática descriptiva de la lengua española*, Vol.2, 3393-3441, Madrid: Espasa Calpe.

山村ひろみ(1998a):「pretérito による表出のための条件－無生主語文の場合－」『言語文化論究』No.9, 81-102.

――――(1998b):「Smith(1991)のアスペクト理論とスペイン語の pretérito」『独仏文学研究』第48号, 135－150.

――――(1999):「スペイン語における事態の分類について」*HISPANICA* 43, 41-52.

――――(2000a):「estar+gerundio の記述と考察（上)」『言語文化論究』No.11, 141-163.

――――(2000b):「estar+gerundio の記述と考察(下)」『独仏文学研究』第50号, 7-28.

Sobre la frase "estar siendo"

Hiromi YAMAMURA

Este artículo forma parte de un trabajo nuestro que trata de dilucidar la función básica de la perífrasis verbal "estar+gerundio". Según Yamamura(2000a) que contiene una descripción global de "estar+gerundio", la mayoría de las proposiciones expresadas mediante esta perífrasis pertenecen a la clase situacional del tipo atélico, o sea, a la clase del tipo de 'actividad' y del tipo de 'estado'. De este resultado, lo que más nos llama la atención es el hecho de que dicha perífrasis verbal pueda aplicarse a las proposiciones del tipo 'estativo' más fácilmente de lo que pensábamos, ya que generalmente en la literatura se ha dicho que la perífrasis verbal de carácter progresivo o durativo como "estar+gerundio" es muy difícil de aplicar a dichas proposiciones. Por lo tanto, este hecho, a nuestro parecer, señala una particularidad de la perífrasis en cuestión. Pensando así, hemos decidido abordar la investigación de la frase perífrasis verbal "estar+gerundio", enfocándonos sobre todo en los ejemplos de la frase "estar siendo", que es la aplicación de "estar+gerundio" a las proposiciones que se componen del verbo *ser* y sus complementos. La razón por la que hemos escogido esta frase es que pensamos que es una proposición típicamente 'estativa'. El resultado de la investigación se resume como sigue:

- Hasta ahora se ha dicho muy a menudo que la frase "estar siendo" es una especie del anglicismo o un uso no correcto, pero según nuestra observación de sus frecuencia y función, está claro, como sostiene Ramos(1972), que dicha frase no es para nada ejemplo de anglicismo y tiene funciones propias que se deben analizar en el sistema verbal de español.
- Rodríguez Espiñeira(1990) insiste en que la posibilidad o no de que una proposición que se compone del verbo *ser* se exprese por medio de la frase "estar+gerundio" tiene mucho que ver con la agentividad de su sujeto. Según nuestra observación, sin embargo, esta idea no tiene validez porque en los ejemplos de "estar siendo" se han encontrado algunos cuyo sujeto no es agentivo en absoluto.
- La frase "estar siendo" significa algo muy diferente de lo que significan las frases expresadas solo por el verbo *ser* o el verbo *estar*. Es decir, tiene las dos funciones siguientes propias: una es señalar la inmediatez de la proposición en cuestión y la otra es indicar su no-cumplimiento.
- Las dos funciones mencionadas arriba de "estar siendo" se pueden explicar mediante la hipótesis sobre la función básica de la frase "estar+gerundio" propuesta en Yamamura (2000b), según la cual la frase "estar+gerundio" es una forma perifrástica para indicar claramente que la proposición en cuestión ocurre sucesiva o acumulativamente.

・Teniendo en cuenta sobre todo el no-cumplimiento de la proposición en cuestión que indica la frase "estar siendo", es indispensable establecer un punto inicial en la estructura temporal de la proposición que se compone del verbo *ser*.